メッセージ　6

士師記の内在的な意義と
神を礼拝することにおけるイスラエルの背教

聖書：士1:1．2:1．17:1-5．18:1，30-31．Ⅱテサロニケ2:2-3．
Ⅱペテロ1:3-21．2:1，15

Ⅰ．わたしたちは士師記の内在的な意義を認識する必要があります：

Ａ．士師記第1章1節から20節で、イスラエルがエホバに尋ねたことは、イスラエルが神に信頼した麗しい光景を描写しています。主と一であるこのすばらしい絵は、神と彼の民との有機的な結合を予表し、ヨシュア記第6章において説明されているように、イスラエルの民が最初に良き地に入ったときの一の継続です――民27:21．サムエル上22:10．23:9-10．サムエル下2:1。

Ｂ．旧約の全面的な観点によれば、神はシナイ山でイスラエルと結婚されました――出20:6，フットノート2：

１．神の観念と願望の中で、彼はイスラエルの夫となることを願い、イスラエルが彼の妻となって、このすばらしい結婚の結合において、彼との最も親密な接触の中で生きることを願いました。

２．サムエルは歴史書を書いたとき、士師記をヨシュア記の後に置いて、イスラエルが夫に対してどのような生活をしたかをわたしたちに見せました。

３．士師記で明らかにされているように、イスラエルにはエホバの妻となる心はありませんでした。むしろ、イスラエルは夫としての神を捨て、遊女のように他の神々を慕い、それを拝みました――士2:11-13，17．3:7．8:33．10:6．参照、エレミヤ11:13．エゼキエル16:25-26．ホセア1:2．2:2。

Ｃ．士師記第1章1節から20節にあるユダとカレブの記事の後、イスラエルの歴史は本書に記録されているように、遊女の腐敗と堕落で満ちています：

１．ヨシュア記は、エホバの御前でのカナンの住民に対するすばらしい勝利に満ちたイスラエルの歴史の書ですが、士師記は、エホバを捨てたことでの、敵の下での悲惨な敗北に満ちたイスラエルの歴史の書です。

２．これが士師記の内在的な意義です。

Ｄ．士師記の内容は、イスラエルの子たちが神に信頼し、神を捨て、彼らの敵によって打ち破られ、彼らの悲惨さの中で神に対して悔い改め、士師を通して救い出され、再び堕落していったことから成っています。これは士師記で七度繰り返されたサイクルとなりました――士1:1-2．2:11―3:11。

Ⅱ．士師記第2章1節は、エホバの御使いについて語っています ―― 士5:23．民22:22：

Ａ．エホバの御使いは神ご自身であり、彼の神聖な三一の中でしもべとして彼の選民に仕えます――参照、ヘブル1:14。

Ｂ．三一の神の具体化はキリストであり、キリストはエホバの御使いであって、旧約で行動するエホバとしてイスラエルを顧みました――出3:2，フットノート1。

Ｃ．キリストがエホバの御使いであることは、神が彼の神聖な三一の中でご自身を立て、委託し、行動して彼の民を顧みたことを意味します。

D．イスラエルは正しい妻として行動しなかったので、イスラエルの夫、かしら、王であるエホバは、彼の妻に対してしもべとなりました：

1．エホバは、彼女に夫、かしら、王としてではなく、エホバに遣わされたエホバの御使いとして来られました――ゼカリヤ2:9-11。

2．イスラエルはエホバをかしらとしなかったので、彼はしもべとなって彼女に仕えました。士師記第2章1節から3節のイスラエルに対する彼の言葉は、叱責や命令ではなく、しもべの勧告でした。

Ⅲ．士師記第17章と第18章は、神を礼拝することにおけるイスラエルの背教を啓示しています：

A．背教とは、神の道を離れ、別の道を取って、神以外のものに従うことを意味します。それは、イエス・キリストの御名の下で、また神を礼拝するという口実の下で、自己のために事を行なうことです――使徒9:2．18:26．Ⅱペテロ2:2，15，21．ユダ11節．士18:30-31。

B．「このミカという人は、神々の家を持っていた．そこで彼はエポデとテラピムを造り、自分の息子の一人を任職して自分の祭司とした」――士17:5：

1．ミカの家が神々の家であり、その偶像（キリストの置き換えとして）、そのエポデ（神の権威を代表する）、その雇われた祭司（聖職者・平信徒階級制度を代表する――士17:7-13）があることは、今日のクリスチャンの間にある神への礼拝に関する背教の状況を描写します。

2．ミカの母は何かを神にささげましたが、彼女のささげ物は、偶像礼拝のパン種と混合していました（士17:1-4）。同じ混合と背教の状況が、キリスト教の中に存在します。

3．わたしたちは、ミカの「神々の家」（17:5）の絵をキリスト教の状況に適用してもよいでしょう。

4．今日のキリスト教には、多くの「ミカの家」があります。ローマ・カトリック教会、国教会、宗派、多くの単立グループは「ミカの家」であり、キリストに置き換わる偶像で満ちています。

C．「ダンの子たちは彫った像を立てた」。そして、「神の家がシロにあった間中、彼らはミカが造った彫った像を立てていた」――士18:30-31：

1．ダンの背教は、分裂の礼拝センターを立てたことでした――17:9-10．18:27-31．列王上12:26-31。

2．ダンは獅子の子として、さらに多くの地を得るために戦いました。地はキリストを表徴します。しかし、ダンは成功して勝利を得た後、高ぶり、単独で、独立的になりました――申33:22．ヨシュア19:47．士18:27-31。

3．ダンの人々が得たものは、彼らを高ぶらせ、独立させ、主が定めた事に服従しないようにさせました――士18:1-31．申12:5，8：

a．ダンは成功したので、高ぶり、個人主義的になりました。彼は自分自身だけを顧み、他の人たちを顧みませんでした――申33:22．士18:27-31。

b．ダンの背教の源は、他の部族を顧みないことにありました。からだの他の部分を顧みないことが背教の源です。

４．イスラエルの歴史全体を通じて、ダンが分裂の礼拝センターを立てたことにおける背教よりも罪深いものや、神の民を損なうものはありませんでした――創49:16-18．申33:22．士18:1，30-31。

５．分裂のセンターはみな、ある人の自己の利益のために立てられます。そのような実行は分裂を生じさせるだけでなく、競争も生じさせます――士18:1，13-31．創49:16-18．申33:22：

ａ．幕屋はシロにあり、刻んだ像はダンにありました――ヨシュア18:1。

ｂ．「神の家がシロにあった間中、彼らは……彫った像を立てていた」――士18:31．サムエル上1:3。

６．キリスト教の歴史には、多くの「ダンの人々」がいました。彼らは他の人たちに服従しようとせず、別の礼拝センターを立てました――士18:1，13-31。

７．背教に陥ることから守られる最上の道は、からだ全体を顧み、また主の一つの働きにおける主の唯一の証しを顧みることです――Ⅰコリント10:17．12:12，27。

Ｄ．聖書の中には、主が再来する前に彼の民の間に大いなる背教が起こるという強力な予言があります――Ⅱテサロニケ2:3：

１．主の来臨の日は、まず背教が起こらなければ来ません――2-3節。

２．この背教は、聖書に啓示されている神のエコノミーの真っすぐな道から脱落していくことです――Ⅰテモテ1:4．エペソ1:10．3:9。

３．今日でさえ、あるクリスチャンたちの間には、新約の真っすぐな道を離れる傾向があります――Ⅱペテロ2:15。

Ｅ．ペテロの第二の手紙の背景と負担は背教です。すなわち、神の真理の正しい路線から逸脱することです――Ⅱペテロ2:1：

１．背教は、信者たちを困惑させる哲学という人の論理へ導くことによって、彼らを神のエコノミーからそらしました――コロサイ2:8。

２．背教の教えは、信者たちを導いて命を与える命の木にあずからせることはなく、死をもたらす知識の木にあずからせました――創2:9，16-17．Ⅱコリント11:2-3，12-15。

３．ペテロが背教を取り扱う時に用いた抗毒剤は、命の備えと真理の啓示です――Ⅱペテロ1:3-21：

ａ．3節から11節で、ペテロは正当なクリスチャン生活に対する神聖な命の備えを用いて、背教に対して予防注射しました。

ｂ．12節から21節で、ペテロは神聖な真理の啓示を用いて、背教の異端に対して予防注射しました――2:1，フットノート3。

４．今日のキリスト教は背教で満ちているので、主は回復、すなわち命と真理の回復を必要とします――ヨハネ1:4．8:12．10:10後半．14:6．啓2:4，15。

Ｆ．今日、背教の時、わたしたちは神の純粋な御言の完全な啓示を証しし、神の御言の中に啓示された、さらに深い真理のために戦う必要があります。その真理は以下のものを含みます：

１．神の永遠のエコノミーに関する啓示――エペソ1:10．3:9。

２．神聖な三一に関する啓示――Ⅱコリント13:14．啓1:4-5。

３．すべてを含むキリストのパースンと働きに関する啓示――コロサイ2:9，16-17．3:11。
４．究極的に完成された命を与える霊に関する啓示――ヨハネ7:39．Ｉコリント15:45後半．啓22:17。
５．神の永遠の命に関する啓示――ヨハネ3:15-16。
６．キリストのからだ、すなわち神の召会に関する啓示――エペソ1:22-23．Ｉコリント12:12-13，27．10:32。

© 2021 Living Stream Ministry